

目次

日中社会学会第23回大会 自由報告の募集	p1	第二回 若手萌芽研究会 報告	p6
在中通信	p2	事務局からのお知らせ	p6

■日中社会学会第23回大会
自由報告の募集

根橋正一・浅野慎一（大会担当理事）

日中社会学会第23回大会は、6月2日（土）、3日（日）の両日、立命館大学において開催されます。

つきましては、下記の要領で自由報告の募集をいたします。皆様からの多数のご参加をお待ちしております。

（1）報告申し込み（報告題目と概要）

期限：4月6日（金）

*準備の都合上期限厳守をお願いいたします。

方法：報告題目と報告概要（4～5行）を下記の大会担当理事へ、原則としてEメールで申し込んでください。所属、連絡先の電話番号及びFAX番号もお知らせください。

（2）報告要旨の提出

期限：5月10日（火）必着

方法：メール（添付ファイル）にて下記大会担当理事へ提出。

書式等：いただいたファイルをそのまま印刷しますので、書式を厳守してください。

①A4用紙横書き2枚。

②1ページ40字×40行。明朝体10.5ポイント。

■在中通信

ント。余白は、上下30mm、左右28mm。

③報告タイトル、氏名、所属を明記のこと。

*自由報告受付先

根橋正一（流通経済大学）

nebashi#rku.ac.jp

送信の際は、#を@に変えてください。

「我回来啦！」

大阪大学大学院 伊藤麻沙子

日中社会学会のみなさま、新年快乐！万事如意，幸福安康！蘭州に滞在中の伊藤です。この冬は蘭州を離れ、中国中部地方の安徽省にある小さな農村で春節を迎えました。中国に来て早2年になろうとしています。初めて中国のお正月の雰囲気を経験しました。今回はそこでの約3週間の生活について簡単に通信したいと思います。

私が滞在した農村の概況ですが、安徽省北部の小都市蚌埠市からバスで2時間のところにあります。村の近くには長江の支流（といっても、かなり大きな川ですが）が流れており、小麦と米の二毛作が行われています。近年、中国の経済発展に伴い、農閑期に都市部へ出稼ぎに行く人々が急増しました。この村の近辺では、たとえば自転車の値段が170元から350元になるといった具合に、この5~6年の間に物価が約2倍に上がったそうですが、食べ物の値段はそれほどではありません。村での主な交通手段は自転車、充電式スクーター、オートバイ、荷台付きバイクです。

また、2~3日おきに朝市が開かれ、ここで野菜、肉、魚、豆皮、干し豆腐、瓜の種、子どものお菓子など毎日の食材を買います。主食は小麦で作るビン（餅）と米です。ビンの中でも、おかずとして食べる豆餅（方言では「千張餅」）がこの辺の地域の特色だそうです。ここでは野菜や山菜、豚肉や鶏肉だけでなく、各種の川魚もよく食べられています。その他、ほとんどの家の庭で栽培されている巻花菜もしばしば食卓に上ります。



な生まれ故郷に帰るわけですが、家に着いて真っ先に言うのがこの言葉です。これは日本語にすれば、「ただいま」というたった4文字のあいさつにすぎませんが、「やっと.....やっと帰って来られたよ」というこの一言に、中国の人々の熱い様々な思いが込められていることを実感しました。特に春節には間に合わず、春節の2~3日後になってようやく帰郷してくる出稼ぎ農家の人たちのこの一言には、とても重みがある感じがしました。

日本語の「家郷」「故郷」「郷里」「ふるさと」「帰郷」「望郷」といった言葉は、現在の日本では田舎の観光産業のキャッチ・フレーズとして、つまりなかば中味のつまっていない弁当箱のような感じでよく使われますが、中国の農村ではこのような言葉が今もなお、ありありと現実味をもっているように思いました。私も日本の農村で育ち、高校1年から親元を離れ、今までずっと1人暮らしをしてきましたが、このように家に帰るのを心待ちにするという感覚はありません。それで中国の人々が「我回来啦！」と言うなり、笑顔で家族や親類と抱き合う光景にはやや驚かされました。



お正月の間、帰省中の農家の人々は当然のことながら農作業もないので、毎日親戚回りをしてはそこで昼食や夕飯を食べ、瓜子を片手に積もり積もった話をしたり、

小銭を賭けてマージャンやトランプをしたりして楽しんでいました。他方、子どもたちはテレビを見たり、寒空の中、外で走り回ったりして元気に遊んでいました。腕白な男の子たちが大好きな遊びの1つは放炮と火遊びです。小さな爆竹は1箱5角～1元と安く、箱の側面の火薬部分でこすって道路に強く打ち付けると1回だけ「パン！」という大きな音がしますが、たまにスカります。これがまた楽しいようです。火遊びというのは、家の前の田畑のわらに火をつけて回る遊びです。イメージとしては焼畑のような感じでしょうか。保育園児や小学生がライターを手にあちこちのわらに火をつけているのを初めて見た時は、山火事になるのではないかとハラハラしましたが、これも楽しい遊びのようです。



私がお世話になった家では魚売りの商売をしています。春節前の1週間が1年で一番の稼ぎ時です。車で3分のこの家の近くの朝市(A), 10分ほどのところにある朝市(B), 20分ほどのところにある朝市(C)の3か所で魚を売ります。旧暦に従って売る場所を交替し、10日間で1回りとなります。10日間のうち、AとBではそれぞれ計4日間、Cでは計2日間売ります。春節前はこの他に、車で約1時間のところにある比較的大きな町の朝市(D)にも売りに出ました。この日は特別な日で、夜中の2時17分に起床し、2時36分に出かけて行きました。昼まで魚を売ってから、午後はそこからさらに約1時間行ったところにある蚌埠市まで魚の買い付けに行き、帰宅したのは夜22時55分でした。春節に最も人気のある魚は大きくて赤い鯉で、その次に人気なのは大きくて黄色い鯉です。これらの魚は近くの川では養殖されていないので、遠くまで仕入れに行かなければなりません。この時期は繁忙期なので、おぼさんの甥(20歳、帰省中)が毎日2人を手伝っていました。毎年のことだそうですが、本当に大変だなと思いました。

おじさんとおぼさんは普段は夜7時～8時には就寝し、朝5時～6時ごろに起床しますが、中学生の娘さんと小学生の息子さんはそれぞれ7時、8時に起床します。お姉さんの方は朝ごはんの準備をするために、弟さんよりも少し早く起きます。また、この地域のこの時期の気温は3度～-3度ですが、暖房器具がないため、私は実際の気温以上に寒く感じられました。寒さ対策として、夜寝る前には必ず熱湯で顔と足を洗います(女性の場合はおしりも拭く)。顔と足が暖まったところでサッと

蒲団に入り，後はテレビを見ながら寝ます。私は6時間寝れば十分なので，10時間以上も寝るのが本当に苦痛でした。とはいえ，早起きしても寒いだけで，やることもありません。私の滞在中，こうした毎日が穏やかに繰り返されていきました。しかし「我回来啦！」も束の間，おじさんやおばさんの親類の農家はもうすぐまた，6月の農繁期までの間，方々の都市部へ出稼ぎに出かけて行くそうです。以上。



■第二回 若手萌芽研究会 報告

去る2011年12月10日(土)、関西学院大学梅田キャンパスにて第2回「若手萌芽研究会」が開催されました。今回は華京碩さん(龍谷大学大学院社会学研究科)及び林梅さん(関西学院大学社会学研究科)に発表していただきました。今回はそのうち華さんによる報告を掲載いたします。

「関東軍と満州における中国語新聞の関係に関する研究—中国語新聞「盛京時報」を中心に」

報告者：龍谷大学社会学研究科 華京碩

今回の報告では、満州国成立後の日本人経営新聞紙『盛京時報』の経営、報道を調査、分析し、それを通じて関東軍が『盛京時報』にどのような影響を及ぼしたか?逆にその過程に『盛京時報』は関東軍にどのように協力したかを取り上げ、関東軍の新聞統制の実態を検証しようとするを目的とした。

満州の新聞と軍との関係に関する研究は現在までのところ日中両国ともすくなく、その客観性にも多少問題があると思う。だから、新聞史研究の視点から満州における日本人経営の中国語新聞と関東軍の関係を研究することは学術的に意義のあるものと考えられる。

『盛京時報』は1906年に日本人の中島真雄が創刊した中国語の新聞であった。日本軍の大陸進出に伴って、満州では多くの新聞がつくられた。『盛京時報』は、その中で最も影響力を持った新聞であり、ほぼ完全な状態で資料が残っている。1932年満州国成立後、『盛京時報』は関東軍の統制を受けるようになり、関東軍と密接な関係の中、経営された。

関東軍自身の新聞経営は失敗に終わったが、現存新聞紙に対する統制にはかなり力を入れていた。そこで、関東軍は現地の日本人経営

新聞の協力で独特の新聞管理体制を構築した。他の地域では見られない現象である。日本人経営の中国語新聞の『盛京時報』は関東軍の最重要協力者の一つとして、終始新聞体制の中核を担っていた。本報告は『盛京時報』と関東軍との関係はどんな関係だったか?また、関東軍の影響はどのように新聞に反映されたか?新聞は関東軍にどのような形で協力したか?の三点を中心に論じていた。

報告後、他の新聞紙との比較に関するご質問をいただいた。今回の発表は博士論文の第一章の背景部分と第二章の歴史事実部分を中心に報告したので、具体的な紙面分析及び他の新聞紙との比較は投稿論文の形で皆様に紹介していきたいと返答した。また、メディア・リテラシーの理論説明が不十分ではないか、とのご指摘については、これからの研究はきちんと基礎理論を念頭に置いて進めていきたいと返答した。

この度は会員の皆様にいろいろな問題点を指摘いただき、誠にありがとうございました。

■事務局からのお知らせ

□メールマガジン、届いていますか?

本学会では、メールマガジンによる広報を行い、研究会、学会誌投稿、ニューズレター発行などのご案内をしています。事務局へご登録いただいたメールアドレスへ「日中社会学会メールマガジン」が配信されます。

これまでにメールマガジンが届いていない方、また、登録メールアドレスに変更のあった方は、事務局までご連絡ください。

日中社会学会ニューズレター No.64

編集：池本 淳一

(早稲田大学)

発行：日中社会学会事務局

〒186-8601 東京都国立市中 2-1

一橋大学・南裕子研究室

info@japan-china-sociology.org

yminami@econ.hit-u.ac.jp

tel: 042-580-8810 (研究室直通)

fax: 042-580-8799 (共同研究室の

ため南宛を明記してください)

○日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801

加入者名：日中社会学会

○日中社会学会・公式 HP

<http://www.japan-china-sociology.org/>

発行日：2012年3月